

(貞享四年版)

讚佛慈悲集
解題

遍立寺衆徒

大竹
功

仮立舎

『讚佛慈悲集』 解題

『讚佛慈悲集』は、江戸時代の東本願寺の学僧、光遠院慧空の著述三点を集めたものである。

この表紙からの印象では、何やら怪しげな感じが引き起こされる。つまり、『讚佛慈悲集』という書物は確実にあったと思われるが、書名の下に 上 中 下 と不揃いにあるが、取って付けた感じがあり、さらにその左下に合本とあるものも、手書きで加えられた感じである。

そして題名の左下に、

賛仏慈悲集上

説聽要文中

感嘆鈔 下

と手書き文字のように不自然に書いてある。このことは、なにか、「不都合な合本」を思わせるものである。（なお、この文中において『』は書籍の題名を表わし、「」は作品の題名を表わすとする）

そのことはさておき、この本の構成について記しておく。この本は表紙にも見られる如く、「賛仏慈悲集」「説聽要文」「感嘆鈔」の三つの内容に分れているのだが、その製作されたことが分かる文がこれらに含まれている。「賛仏慈悲集」貞享四年四月十五日草稿、同年十二月二十日清書が出来上がる。「説聽要文」見当たらず。「感嘆鈔」貞享五年改元、元禄元年十月八日、とある。（改元は九月三十日）

実際にこの本が発売されたのはいつなのかはハッキリしないが、ここでの約束事として、「讚佛慈悲集」に関しては、

「讚佛慈悲集」貞享四年版

としておく。

なぜこのようにするかというと、本日（令和三年八月七日）現在、細かい所まで確認したわけではないが、

『讚佛慈悲集』 付「説聽要文」 著者…恵空 享保三刊 二冊揃

として、神田の某古書店で売っているということがあるからである。私自身はその「享保三刊」に触れていないので、詳細がどう違うのか知らない。しかし、貞享四年と享保三年とでは、三十一年の違いがあるので、もしかしたら享保三年のものは、「改訂版」なのかもしれない。しかも、慧空とするならば最晩年を自覚できる年齢でもあるのだから、手を加えている可能性は十分ある。

そういう面からするならば、丁寧に二本を比較することが必要かも知れないが、「貞享四年版」は慧空が 四十四歳と脂が乗っている頃の作品だと思うので、比較材料があることを承知の上で、この「讚佛慈悲集」(貞享四年版)について、詳しく見てみようと思う。

「貞享四年版」の「讚佛慈悲集」は次のような構成になっている。

「讚佛慈悲集」本 第一章 他力分別(二丁右く十七丁左途中まで)

第二章 廣釋慈悲(十七丁左の途中から廿九丁右)

「讚佛慈悲集」末 第三章 解報其恩(二丁右く七丁左)

である。

これを詳しく見ていくと、浄土真宗の学者として初めて、「本格的に「他力」ということを明らかにしようとした」ことに関しては、私は敬意を表するものである。ただ、浄土真宗に生きたいと思う者にとつて、慧空のこの論が適切かとなると、ここには大きな問題がある。そのことについては、

書下版「讚佛慈悲集」(このデータを、このホームページで同梱)

を編著する中で「後記」に述べているが、大筋で言えることは、

「浄土真宗としての他力」

という見解が、「讚佛慈悲集」では、ほぼ意識できていないことを挙げることができる。

後世の浄土真宗の学者も「他力」ということが扱いくかかったと見えて、一論をもつて「他力」を明らかにしようとする学者はいなかったのではないか。

そういう状況の中で、令和二年（二〇二〇年）五月二十日に亡くなった宗正元先生は、一九九九年に横浜の高明寺というお寺で法話をされた、その時の題名が「他力ということ」で、慧空の「他力の六義」ということを取り上げておられた。その時に、慧空の言うことを基礎としつつも、慧空の「弥陀別益の他力」ということを親鸞の教えの基本となる「転成」ということで話された。（別途資料参照）これは、「弥陀別益の他力」とは「転成」のことなのだということをお話されたことであると思う。宗先生がこの高明寺以外で慧空の「他力の六義」を話されていることの記録の一部があるのだが、高明寺より前だったのか後だったのかは、現在（令和三年九月一四日）の時点では判明していない。しかしその記録には「弥陀別益」について「転成」ということは出ていない。おそらく「雲集学舎」の講義で話されているものではないかと推測するが、この辺はかなりシビアな話になるので、ここではこれ以上進まないこととする。（今後も調査は継続する。判明次第、このホームページで公開する）

ただ、宗先生に関しては、今まで特に見向きもされていなかった（その証拠に、浄土真宗の諸典籍集に、この書が編集されていない事実がある。慧空の他の著作は何点かが残されて、浄土真宗の歴史的な著述を類聚したものに含まれている。しかし、『讚佛慈悲集』は版本のまま放置され、学ぶ者が書下し文を目にすることもないのだ。そのことは、「他力」を本格的に問い直す人はいなかったのだろう）。「弥陀別益」を「転成」と見取ったことは、画期的なことだと言えよう。しかしながら、そのように見取ったことを注目した人もいなかったようだ。それは別の原因として「転成」ということを知らない学者・僧侶が余りにも多かつたということの証明だろうと思う。

そういう中で、宗先生は『讚佛慈悲集』を発掘して、「讚佛慈悲集」を限定された範囲ではあるが説いてきた。このことは、「浄土真宗として他力をもっと明らかにしたい」という宗先生の願いだっただけではないかと思う。

（少し脱線するが、宗先生の学びの系譜は、清澤満之——曾我量深——安田理深の所謂「近代教学の系譜」にあるといえる。そういう中で少し傾向が異なると思える梶鳥敏（清澤満之に深く係わった人なのだが）の『恵空語録』（無我山房発行・明治四十二年五月）に宗先生の三十歳

代には少なからず影響を受けたのではないかと思える。以下は、いささかの空想が入るがお許しいただきたい。

宗先生の個人史は殆ど知られていない。自著では『人 使命あり』でわずかに出てくることを、浄土真宗の諸先生の名とすり合わせる形で出してみたい。

清沢満之…一八六三年(文久三年)八月一〇日 ～ 一九〇三年(明治三六年)六月六日
曾我量深…一八七五年(明治八年)九月五日 ～ 一九七一年(昭和四六年)六月二〇日
暁鳥 敏…一八七七年(明治一〇年)七月一二日～一九五四年(昭和二九年)八月二七日
金子大榮…一八八一年(明治一四年)五月三日～一九七六年(昭和五一年)一〇月二〇日
安田理深…一九〇〇年(明治三三年)九月一日 ～ 一九八二年(昭和五七年)二月一九日
宗 正元…一九二七年(昭和二年) ～ 二〇二〇年(令和二年)五月二〇日

『人 使命あり』のなかで、「念仏の声がいくらかでも聞こえるようになってきたのは、三十歳近くになってからであります。すでに妻があり子があり親をかかえていた身ではありますが、その頃から、家を後にして旅に出る非が多くなってきました」(3ページ)とか、「そういうしてるうちに、たまたま家庭の事情で、家も貧しかったし、途中で学校をやめて就職したのです」(18ページ)とか、「日本が戦争に総力をあげていた頃、私は旧制高校の学生でしたが、その日本の国民としてどう生きねばならないのか、また、父のいない家庭の長男としてどういう道を選ばねばならないのかと、自分の生涯を問題にして思案していたことがあります」(82ページ)や、「それやこれやが折り重なって。再び『歎異抄』を開く機会が訪れてきました。それは、長男がよちよちと歩きはじめるようになった、二十七、八歳の頃であります」(84ページ)とそういう「個人情報」が、ちらちらとこの本に書かれているが、そこから逆算すると、終戦の一九四五年は先生一八歳の時であって、この時に旧制の福岡高等学校の中退した様に書かれ

ているが、どうなのだろうか？ つまり、尋常小学校を六年で卒業で二二歳。一九四一年からは、尋常小学校の六年を卒業した者は、『高等学校の受験資格』を、合格すればその高等学校に入學できる。当時の福岡高等学校の修業年数は、六年に短縮されているので、順当に學業が進めば一八歳で卒業できる。そういう点からは、卒業直前に中退したということとしか考えられない。とても残酷な話になるが、卒業直前に福岡高校を中退して会社勤めとなつて、そこで労働者に目覚め、組合活動をしていくことになるようだが、「再び『歎異抄』を開く」のが「二十七、八歳の頃」であり、「念仏の聲が聞こえるようになったのが三〇歳近くになつてから」ということから、一八歳から数年間は、「オルグ活動」で多忙だったのかもかもしれない。いや、二十七、八歳の頃」には、京都の専修学院に學んで、宗務職員として出張が多かつたのかもかもしれない。

ただ、私はその頃に亡くなつた真宗大谷派教団の重鎮に、宗先生は氣になつたのかもしれないと思つてゐる。その重鎮が現在の自分の年齢の時にはどういふことをしていたのかという單純な疑問。その当時に亡くなつた重鎮を探せば直ちに「晧鳥 敏」が出てくる。前に示したように、亡くなつたのが「一九五四年（昭和二九年）八月二十七日」であり、葬儀が話題になつたであろうし、宗先生の耳にもその狀況が伝わつていたのではないだろうか。宗先生、二七歳の時である。

ではその晧鳥師が二七、八歳の時何をしてたのか？ そこで出てくるのが、もう既に晧鳥師は本を出していた。「浩々洞」に直接は関係しそうなないが、一九〇九年（明治四二年）に『惠空語録』という本が目を引く。この本は、晧鳥師三二歳の時のものだ。その年代に近い宗先生が、そういう著作が氣になつたとしても不思議ではない。宗先生が真宗大谷派の「話す立場」になつたのは、出された本から類推するならば、昭和四〇年頃（宗先生三八歳頃）からであるから、先生が晧鳥師に關心を持つたとしても不思議ではない。その頃の宗先生は、學びに學んでゐる時代でもあつただろうし、その中で、「他力」とか「利他」について確定的に聞き取つたということはないはずだ。特に「利他」に關しては、昭和六二年一月八日・九日に城崎温泉西村旅館で開かれた「四先生の座談会」（和田稔・藤元正樹・宮城顛・宗正元。後に、『大谷派なる精神』

という書名で出版された)でも、四先生において「利他」の領解が一致していなかったことから、宗先生の若いうちから、他の諸師においても、教団全体を通して「利他」がはっきりしていないのであり、宗先生の三〇歳前後から「利他への関心」と言うことは根深くあったのではないだろうか。

そういう中で、宗先生は、『惠空語録』と出遇ったかもしれないと私には思える。この『惠空語録』は「利他」「他力」ということに関して、頻繁に惠空の言葉を引文している暁烏師の『惠空語録』には、宗先生が将来において惠空の著述そのものに出遇う機縁が含まれているといえよう。

この『惠空語録』は四〇四ページの大冊であり、そこに一九三の惠空の言葉と受け止めた暁烏師の領解が示されている。これに宗先生が刺激を多く受けたとしても、不思議ではない。今になってそのように感じる理由は、宗先生にある「善導大師の香り」である。そのことが、暁烏師と極めて近く感じるのだ。すなわち、『惠空語録』においても「善導大師の香り」を強く感じるのである。

しかしながら、私は宗先生の話をつくづくかは聞いてきたのであるが、その中で、宗先生と暁烏師の関係を感じさせることは全く無かつたと思う。いわば近代教学の主流の金子大榮・曾我量深・安田理深の諸師の話は出てきたが、暁烏師ということは、それこそ宗先生が「内心に深く蓄えた」ということではなかつたかと、今になって思う。それが、宗先生の六〇歳代になって『讚佛慈悲集』を入手できた縁になつていのではないかと思つている。

長々と私の推測を申し上げたが、宗先生と『讚佛慈悲集』の「他力の六義」を私どもに講じるようになった背景を考えてみることも、真宗門徒としては決して排されるべきものではないと思つている。しかし、いささか冗舌になつたことをお許しあれかしと願う。

さて、この『讚佛慈悲集』の原本は、製本されたサイズは、縦260ミリ・横185ミリで、遊び紙や中表紙もなく直ちに「讚佛慈悲集」の本文が始まつている。(同梱の2「讚佛慈悲集」本文を参照された

し)本文は中央に折り返し幅9ミリほどあつて、著作名、例えば上なら「讚佛本〇」と「丁数」が入っている。本文用紙部分は枠線が入っており、左右丁ともに天から35ミリ前後、地から10ミリ前後、ノドから32ミリ前後の余白を持つ。枠線は縦²¹⁰ミリ前後、横¹⁵⁷ミリ前後の枠内に十行分があり、基準的な一行の文字数は二十である。但し、急遽文字数を増やすことも、無いわけではない。

意外なことは、罫線で作られた枠が、存外細かな違いがあることだった。「讚佛慈悲集」「説聽要文」は同じ程度の大小の枠内であるが、「感嘆鈔」では、罫線枠も小さめになり、行数は九行、文字数は十六となつている。一冊の中で用紙の基準が違つていることに、すこし驚いたとともに、この一冊は、もともと一冊として計画されたものではなく、出来た刷りを組み合わせて本にするという企画だったのではないかとも思えてきた。そういう意味では、改めて某古書店で売っている享保三刊の『讚佛慈悲集』に関心が向いてきたということはある。

使用している用紙量は、『讚佛慈悲集』全体で「讚佛慈悲集本」二十九丁、「讚佛慈悲集末」七丁、「説聽要文」十二丁、「感嘆鈔」二十二丁の合計七十丁である。また、綴じ穴は、「背」から9ミリの所で四ヶ所、上下に16ミリ前後の所に各一と、そこから71ミリくらいの中央に向けた所に各一ヶ所ある。そして、補強してある表紙二枚。

ここまで見てきて、はて、この本は本来どういう表紙が付いていたのだろうか？と気にはなつた。はたして「正規の出版だったのだろうか？」と。

そういう書誌学的な面白さの追究も悪いことではないだろうが、今回、「讚佛慈悲集」の「書下し版」を製作する意図は、私どもにもつと「他力」ということが明らかになること念じているということがあるからである。「他力」一般は一応明らかには出来たとしても、「浄土真宗としての他力」ということが明らかにならなければ、慧空の努力も、慧空を取り上げた宗先生をも、「他力」ということに関してこの先達を見殺しにすることになると思う。せっかくのご縁で

知りあった慧空と宗先生に対して、「だからこそその批判」を私自身としては大切にしていきたい。

最後に、この『讚佛慈悲集』の流伝の歴史を掲げておく。

元々の所有者などは判る由もないのだが、この本は、アバウトで言うなら、一九九〇年代中葉に、宗先生が神保町の「小宮山書店」で一万円前後で購入したことが最初である。その後、宗先生が体調を崩してこれまでの居宅（行人舎）を引き払う時に、多くの蔵書を望む人に附与したのだそうだが、『讚佛慈悲集』を受け取ったのが（私は知らなかったのだが）大島正念さんだった。そしてある聞法会で講師をしていた大竹が、宗先生の講義録や高明寺のインターネットからの記事を基に、たまたま令和元年十月ころから「他力」の話をしてきたのだが、どうしても原本の『讚佛慈悲集』を見たくなり、拝領していそうなお寺に声を掛けてみた。だがいずれも「拝領していません」ということで、思い切つて宗先生に「『讚佛慈悲集』をまだお持ちか」どうかを尋ねてみた。それが令和二年二月七日のことである。「さあ、もう誰かにあげてしまったなあ。誰だったか覚えていない。大島君だったかなあ」という返事を貰ったので、大島さんに尋ねてみた。「いやあ、ウチにはないと思うよ」という返事だったよ。しかし、一週間後に包んであるものが私に差し出され、「済まない。ウチに『讚佛慈悲集』はあったよ。大竹さんがベストと思う方法で処置してくればそれで結構」ということになった。有り難く拝領した次第である。

それ以後、和綴じをバラして、一丁づつ丁寧にコピーを取った。五冊分である。五冊の行き先は決めている。最終的には、原本『讚佛慈悲集』、『讚佛慈悲集』の全ページ画像を電子データ化したディスク、「讚佛慈悲集」の引文確認集の冊子、「讚佛慈悲集」の書下し文の冊子、コピー本の和綴じ『讚佛慈悲集』の五点をセットにして、私宅よりも遥かに安全と見込める撰取山善能寺様に寄贈し、将来を託したのが、令和二年二月二〇日であった。

しかしながら本来の予定は、『讚佛慈悲集』の全ページ画像、「讚佛慈悲集」の引文確認集の冊子、「讚佛慈悲集」の書下し文の冊子の「三点セットの電子出版」を発行するつもりであったが、発行する限

りは「市販」、つまり「定価」をつけることになり、そうすると、「讚佛慈悲集」の引文確認集の冊子のみならず、今後加えようと思っっている『惠空語録』全ページに関しても、「著作権問題」でこじれそうなので、電子出版を取りやめ、私自身に何の権益も発生しないで、誰でもホームページからコピーできるものにした次第である。全体の名前を「浄土真宗の「他力」考」の資料」として、

浄土真宗の「他力」考 資料リスト

- ① 『讚佛慈悲集』 解題
- ② 『讚佛慈悲集』 全ページ
- ③ 『讚佛慈悲集』 引用文献の確認
- ④ 『讚佛慈悲集』 書き下し文
- ⑤ 宗先生の「惠空の「他力の六義」の講義（二種あり）
- ⑥ 『教行信証』の中からの「他力」に関する引文
- ⑦ 『惠空語録』全ページ

を、縁ある人にコピーフリーで利用していただき、一人でも多くの人たちによって、「浄土真宗の他力」を、平易に、明らかにしてくださることを念じている。

また、私としては「弥陀別益の他力」を「転成」と提起した宗先生に対して、「浄土真宗の他力を転成として受け止める」ということを私どもに考えさせた最初の人として、忘れないでおきたいと思う。

二〇二一年（令和三年）九月一五日

大竹 功

光遠院慧空略歴 ○「コトバンク」によれば、一六四四—一七二二。江戸時代前期～中期の僧。寛永二十一年五月十五日生まれ。比叡山でまなび、のち真宗大谷派の円智に師事。延宝八年京都西福寺住職。正徳五年学寮の初代講師となる。「無量寿経講義」「叢林集」など多くの著作がある。享保六年十二月八日死去。七十八歳。近江（滋賀県）出身。俗姓は川那辺。字は得岸。号は光遠房。法名は惠空とも書く。以上

